

青森県風間浦村桑畑・むつ市大畑町関根橋のテラ行事調査報告

古川 実¹⁾

The Report on Tera ritual at Kuwahata (Kazamaura, Aomori prefecture)
and Ohatamachi Sekinebashi (Mutsu, Aomori prefecture)

Minoru Kogawa

(キーワード：テラ ババ 念仏)

はじめに

青森県下北地方における「テラ」、「テラこ」などと呼ばれる宗教的な施設と、その場でムラの女性たちが行う行事などについて、平成25年度から毎年度本紀要において調査報告をしてきた²⁾。今年度は風間浦村桑畑とむつ市大畑町関根橋の調査報告を行う。

筆者は青森県史編さん民俗部会の社会組織分野担当として、平成13年に桑畑、関根橋で聞き取り調査を行っており、調査結果を各調査員とともに『青森県史叢書 下北半島北通りの民俗』（青森県史編さん室 2002年）に報告している。今回再び訪ねたのは、テラを巡る民俗を中心にもう少し詳しく調査したいと考えたこと、また、十数年経ってどのような変化が見られるのか関心があったからである。本報告は現状の記録だけに留まったが、テラとその管理の中心的な役割を担う下北地方のババ連中などの女性仲間の変化について、今後も注意していきたい。

1 調査地の概況

風間浦村桑畑とむつ市大畑町関根橋は、下北半島の津軽海峡に面する地域の中央部に位置する。桑畑は海岸沿いの漁業を主とする集落であり、関根橋は正津川河口から4 kmほど遡った農林業を主とした集落である。

桑畑の家数は享保6年(1721)5軒、享和2年(1802)桑畑及び杉ノ尻5軒とあり³⁾、明治初年の『新撰陸奥国誌』では易国間村の支村として桑畑家数13と記録されている。平成13年の戸数は50戸前後で、現在は27、8戸という。

桑畑の神社は享保年間の勧請とされる八幡宮⁴⁾。神社の管理・運営は桑畑の男性が行い、女性は参拝するものではないといわれていた⁵⁾。

関根橋は寛文(1661-1673)のころに五戸から移り住んだ者が草分けした集落とされる⁶⁾。享保年中(1716-1736)の調に家数10軒、享和3年(1803)23軒⁷⁾、『新撰陸奥国誌』では正津川村の支村として家数34、「山業の者多し」と記録されている。平成13年の戸数は約45戸、現在は50戸弱である。

関根橋の神社は、天和3年(1683)勧請とされる妙見神社⁸⁾。また、千手観音を祀るお堂があり、かつては「カミの家」と呼ばれる家がベットウとして管理したが、現在は町会で管理している。観音像には正徳3年(1713)の墨書があるという⁹⁾。

2 風間浦村桑畑のテラの行事

(1) テラの概要

桑畑は海岸沿いの狭い平地に、一本の道を挟んで家が向かい合って並ぶ集落である。家並み中央部の山側に地藏堂があり、地藏堂とか地藏様と呼んでいて、テラという呼び方は聞かなかった。ただ、この施設の機能などは筆者が今まで報告してきたテラと同じ事例と判断し、本報告ではテラと記すこととする。堂内に地藏様(ジンジョ様)と釈迦誕生仏を祀る。地藏のお姿(像)は、もとは恐山に祀られた像だったといわれ格の高いお姿だという。桑畑では易国間の東伝寺(曹洞宗)の檀家が多く、東伝寺の和尚がお勤めに来訪するが、テラには宗派に関係なく集まっている。祀っている地藏様が恐山とつながりがあるから、東伝寺でお勤めに来ているのではないかという。

地藏堂は桑畑の集会所でもあり、公民館がないときは部落総会も地藏堂で行った。現在も集落のはずれにある公民館ではなく地藏堂によく集まるという。

(2) テラの管理

テラの日常的な管理はいつもお参りして集まるババたちが行っている。集まる人数はいつもは10人くらいであるが、家の用事が忙しくて5、6人のときもあるなど、強制ではなく任意の集まりとなっている。若い人もたまに来て

1) 青森県立郷土館学芸課長(〒030-0802 青森市本町二丁目8の14)

いるが、70歳以上ぐらいの女性を中心である。テラに集まる日（メイニチ）は、昔は毎月の3日、15日、24日、現在は毎月15日と24日。3日はムラの神社の八幡宮が焼けた日でそれで集まる日となり、15日は八幡宮の祭り日、24日は地藏様の日なので集まるのだという。

テラの電気・水道料は桑畑自治会で支払っているが、祭壇へのお供えや集まりの際の経費などは、桑畑全戸から各戸200円を3月15日の涅槃、7月24日の地藏祭、8月7日のなぬか盆、12月3日のザゼンの行事前に集める。以前は毎戸100円と米を集めた。徴収はババのうちの80歳前後の年長者3人ぐらいで回り、そのうちの頭が經理の帳面を持つ役となる。また、月ごとのお参りなどで参り銭があがるので、それもババが管理し経費として使っている。参り銭はだいたい一人100円ぐらいあげている。

地藏堂で葬式を行うことはなく各家で行った。そこで、人が亡くなると遺体を隠す屏風が必要であったが、家で準備できないときは、テラに葬具一式と膳なども揃えてあって、それを借りて行った。貸し借りはババどが行い、貸した料金を積み立ててテラの経費とした。今は葬儀屋に頼むからテラから道具を借りることは無くなった。葬式も公民館で行うようになってきているという。

月ごとのお参り日は地藏様にオレイゴゼン（霊供膳）をあげる。これを作ってあげるのは桑畑全戸の回り番となる。念仏が終わるとこの膳をテラに集まるババがよばれる。また、年間の行事ごとに料理や飲食などの世話をする当番を決めていて、涅槃、ザゼンは5戸ずつの当番、地藏祭と盆は3戸ずつの当番が行っている。これらの当番は八幡宮の祭の当番も含め桑畑の総会で決めている。

（3）行事

テラには毎月集まるほかに仏事の節（セツ）があり、人が集まる。以下、テラの年間の行事を新暦で記す。

正月 年取りは各家で行い、テラにお供えをあげる家もある。テラに年縄、松は迎えていない。

3月15日 涅槃。東伝寺の和尚が来てお勤めをする。

春の彼岸

5月8日 ゴガツヨウカ。お釈迦様の日で、堂に小さい釈迦像（誕生仏）があり、柄杓で甘茶をかける。これは当番ではなく、集まるババどだけで行っている。

7月24日 地藏様の祭。東伝寺の和尚は恐山に行つて来られないので、ムラでお祭りをする。昔は地藏堂と書いた赤い旗幟を立てた。参拝に易国間からも来ていて、恐山大祭に行かずここに来る人もいた。

8月7日 なぬか盆。東伝寺の和尚が来てお勤めをする。盆は7日から16日まで。16日にお供えなどを下げる。

（8月15日 八幡宮の祭。かつては10月15日だったが出稼ぎで人がいないので、皆が帰ってくる盆に例大祭を行うこととなった。）

12月3日 ザゼン。「ナムシャカのしゃべごとしろ」といわれている。砂糖をまぶした砂糖団子をあげる。団子をソウワに100個三角に積んで（ピラミッドのように積んで）あげ、終わると団子を各戸に5～3個配った。今は1～2個配るだけにしている。

12月8日 東伝寺の和尚が来てお勤めをする。

（4）その他

畑作業がまだ始まらない雪解け4月中旬ごろに、病気がムラに入らないように部落のはじはじで数珠を回した。20年前ぐらいからやらなくなった。

亡くなった人があれば通夜の日にも数珠を回したが、今は必ずやっているかわからないという。病気が入らないように行つた数珠回しの念仏と通夜の念仏は違って、数珠回しは教本の文句ではなく、ベツトウが唱える文句である。念仏は毎月集まったときに練習し暗記した。

涅槃、なぬか盆、12月8日に東伝寺の和尚が来てお勤めをし、その後フジ（諷誦文）をあげる。フジは各家の先祖の回向で、お願いする家が御霊前の袋（昔は半紙をたたんでお金を入れた）に回向料を入れて祭壇にあげ、それを見て和尚が「〇〇（世帯主の名前）先祖代々」と読み上げる。そうするとその家と親戚が和尚の後ろに賽銭を撒く。この賽銭はテラの行事や地藏様の世話のために使う。

3 むつ市大畑関根橋のテラの行事

（1）テラの概要

大畑川方面からの道と正津川沿いの道が交叉する関根橋の入口付近にテラがあり、墓所が隣接する。関根橋ではテラとかテラと呼んでいる。テラの本堂には梅翁堂と書かれた額が掲げられている。

『新撰陸奥国誌』には、「梅翁軒 境内二十五坪 支村関根橋の東入口南側にあり 大畑村大安寺の末庵曹洞宗なり 宝暦二年（1752 筆者注）壬申大安寺三世寿仁が開基にして寿仁が従弟法天妙両尼を庵主とせり」と記している。資料冊子『暮らしと信仰の移り変わり』によると、寛延元年（1748）に大畑大安寺（曹洞宗）の宿寺として寿仁が建

立したと記す「梅翁庵由緒」が所在し、また関根橋の梅翁庵が無住となり廃庵同然となったため、明治26年（1893）12月から翌年1月の間に大安寺及び関根橋信徒総代と八戸市の対泉院及び対泉院檀家総代とが庵号譲渡の証書受け渡しを行ったという¹⁰⁾。大安寺副住職長岡氏からも梅翁庵から梅翁堂になったのは、寺籍が変わったからではないかという御教示があった。資料により建立年に相違があるが、関根橋のテラは18世紀後半に梅翁庵として建立され、明治になって寺籍庵号が移されたものの、梅翁堂と名称を変更してテラとして存続してきたと考えられる。

現在の建物は本堂部分とストーブのある部屋、台所、トイレ部分を合わせ間口約8間、奥行き約4間。本堂向かって左手に位牌堂が設置されている。正面祭壇には本尊釈迦如来、左手に地藏、右手に弘法大師の石像、その右に木像が祀られ、祭壇右手にかつての庵主の位牌が祀られている。『新撰陸奥国誌』に記された所在場所と建物の敷地面積は、現在もほぼ同様と思われる。ただし、建て替えは何度か合ったようである。テラは以前は小屋のような建物で、現在のような位牌棚もなく祭壇の回りに位牌をごちゃごちゃ置いていたときもあり、また本堂に寺子屋（小学校）だったときもあったという。現在の建物は昭和55年（1980）に改築したもので、位牌棚を設置した位牌堂も整備されている。位牌棚の割り当てはクジで決めたという。

（2）テラの管理

テラの電気、水道代は関根橋町会で払っているが、テラの行事やお供え、除草、清掃などの経費は、8月17日と12月24日の年2回、ツナギといって関根橋全戸から200円を徴収している。関根橋は15戸前後で3班に区分されており、班ごとに集める。8月17日は観音様の日で和尚も来るのでテラに人が一番集まる日であり、12月24日は地藏様の年取りの日で、後述するババどの総会の日でもあり、1年間の会計報告が行われる。ツナギのほかにお参り錢もテラの経費としてババどが管理する。

ババどというのはテラを世話する係で当番となっており、1軒から1人女の人が出ることになっている。場合によっては若い人もババどということになる。関根橋の集落中央部にある消防屯所のあたりから、ムラガカミ（山手の方）とシモに区分けされていて、毎年交替で当番になる。平成29年はシモが当番となり、テラに供える正月のお供え餅はカミで作ることになっている。

念仏をする人もババどといい、テラにいつもお参りしているお年寄りの女性である。昔は80歳を越えるとあまり家の外には出なかったが、今は90歳でも来ているという。

（3）行事

テラの行事を新暦で記す。

1月17日 観音様の日。平成30年の実施状況は次のとおりである。

8時30分ごろには当番がテラに来て、行事が終わってから出すソバの準備を始める。

9時ごろからは参拝者が集まり始める。ほとんどが女性であり、まず自家と親戚の位牌棚にお菓子などのお供えをして拝み、次に本尊の祭壇、昔の庵主位牌の祭壇の順に参り錢をあげて拝む。本尊祭壇にはビニール袋や重箱に入れた米5合とお布施をあげる。米、お布施はお勤めに来る大安寺和尚が布袋に集めて寺に持って行く。

関根橋町会長(男性)と和尚が揃い、10時30分からお勤めが始まる。般若心経の読経があり、その後に先祖の回向として和尚によるフジ(風誦文)の読み上げがある。各家の世帯主の名前が読み上げられるとその家の人や親戚の人が賽銭を和尚の後ろの方に投げる。100円玉が多い。

フジが終わると関根橋の南側にある千手観音堂に移動し、11時30分ごろから観音様の供養を行う。祭壇には大きな二重のお供え餅、粳米の粉で作った大きなシトギ2本、お神酒をお供えしている。和尚が太鼓を叩いて観音経を読み御祈禱を行う。12時前に終了しテラに戻って会食をする。

3月15日 涅槃。前日にテラでウルチとモチ7対3の米粉で丸い団子を作り、15日に大安寺で行われる涅槃にソウワ一つに55個の団子をピラミッドのように積み、それを二つ持って行って供える。これはババどのお金で作っている。お経の後、本堂で昔はお菓子を撒いたが今は団子になった。団子をいただければ体が良いといって、拾って持ち帰り各家に配るが、団子を勢いよく撒くので拾うのが怖いくらいだという。

3月21日 弘法大師の日。彼岸のお参りと念仏を行う。

5月8日 念仏を行う。

7月24日 地藏祭で以前は恐山に参拝した。

8月 盆 墓とテラにお参りする。関根橋では8月7日から20日まで、夕方灯を点けにテラにお参りする。

8月17日 観音様の日。大安寺和尚が来てお勤めをし、千手観音堂で観音様の供養をする。1月17日と同様。

12月24日 地藏様の年取りとババどの総会。平成29年の実施状況は次のとおりである。

8時30分ごろから当番数名が来て、お昼に出す雑煮の準備をする。雑煮の作り方などを年配者が初心者に教えながら準備をしている。雑煮は干しシイタケのもどし汁、昆布、煮干しで出汁をとり醤油仕立

てにし、ゴボウ、ニンジン、油揚げ、餅を入れたもの。また、祭壇、位牌棚に正月のお供え(丸餅二重ねとミカン)を供える。各仏様(仏像)の前と位牌棚に供え、位牌棚には2区画に一つぐらいの間隔であげる。念仏を始めるころに祭壇、位牌堂の蠟燭に灯を付ける。

9時ごろから次々参拝者が集まる。参拝者はまず位牌棚に果物、酒、缶のお茶、リポビタン、ヤクルトなどを供え拝む。次に本尊、庵主位牌の祭壇に参り銭をあげ拝む。観音様の日の参拝と同様である。

10時ごろには大方集まっており、ストーブの部屋でツナギの徴収。その後、総会となり会計報告が行われる。

10時30分ごろから念仏と御詠歌をあげる。大安寺で梅花流御詠歌を習った3人(ババどのうちでも高齢者となっている人)が祭壇前に座り先導する。最初は「十三仏」の三辺返しで同じ詞章を3回唱える。十三仏の詞章を記した紙が祭壇の下にいつも置いていて、それを皆に配る。次に御詠歌の教本を置いて前の3人が鈴を鳴らしながら御詠歌を唱える。最後は南無本地釈迦如来のお経をして、11時すぎに終了となる。その後は雑煮、漬けものなどが出来、皆で食事をする。

この日は各家でも正月のお供えをあげており、ケンチン汁を作る。昔はササギも具に入れたもので、ケンチン汁を味噌仕立てにするとケノ汁になるという。

(4) その他

念仏は昔念仏といって昔からあって暗記するものだった。御詠歌は梅花講に入り大安寺で習った人が教えた。今は念仏、御詠歌をできる人が少なくなり3人だけになったという。

1月17日と8月17日の観音様の日は、昔は大安寺の和尚が関根橋の各家を回り、家々ではお布施と米(オトキ米という)1升くらいを皿に載せて出した。和尚は1斗くらい入る布袋をいくつか持ってきた。

関根橋の千手観音はもとは黒森山神社に祀られベツトウが管理していたが、神仏分離で神社から関根橋のカミの家(関根橋では一番古い家の一つとされ、オシラサマを祀っている家だという。)に管理が移り、観音堂を建て祀るようになったという。そこで関根橋には年2回観音様の日に大安寺で御祈禱に行くようになり、カミの家が宿になって和尚の食事の世話などをしていたという。平成の始めごろに位牌棚が整備されてからは、各家の先祖供養のためのフジをテラで合同で行うようになった。檀家の名簿があって、フジではそれを読み上げている。「○○(世帯主の名前)家先祖代々…ショウレイ」と読み上げると、100円でも200円でもいくらかでも良いので、和尚の座布団の回りに向かって投げる。以前は和尚に向かって投げたが、今は置くように投げているという。

大安寺の行事など

梅翁堂の本寺である大安寺(大畑町本町)に地域の人が集まる行事は、涅槃、彼岸、盆と梅花講の人が集まる浄土会がある。4、5年くらい前までは3月中ごろにオゴ(お講)といって、大安寺近くの地藏講の人が集まり和尚の話聞きに来た。終わってハチヘイ汁などの料理が出て食べた。

3月15日の涅槃では各町内から団子が集まり、お経を読んだ後にその団子を寺の世話をしている人たちが本堂の中2階から参拝者に撒く。参拝者は団子を拾う合い賑やかである。

12月24日にシメ地藏とかジンジョ様の日といって、大安寺近くの門前町会の地藏講がお参りに来ている。

大安寺でフジを行うときも本堂で参拝者が自分の前に賽銭を置く。以前は和尚にぶつけるように投げたようである。

大安寺が棚業などで出向くのは、関根橋の梅翁堂、小目名の地藏堂(寺格がない)、高橋川である。高橋川ではテラがないため、今でも旧元日と8月20日の送り盆のときに一軒一軒回っている。川代、烏沢には葬儀で呼ばれることはあるが、各家を回ったりテラでお勤めすることはない。また、二枚橋から赤川には行ってないという。

【資料】

関根橋で見せていただいた念仏の詞章を記録しておく。

○ 地藏様の年取りの際、参拝者に配られた十三ぶつの詞章。テラの祭壇下にいつも用意している。

十三ぶつ

なむ十三ぶつ なむほんし たしけたまいや 十三ぶつ あのよのじょうどい うけたまい ふどう しゃかもんじゅ ふげん ちぞう みろく やくし かんのおん せいし あみだ あしゅくだいにつこうぐぞう おうじょう りんじゅうの そのときは ねんぶつ一ぺん もうされず ただいまもうしおねんぶつ うけとりたまい なむほんし なむしゃかむにぶつ なむほんし なむしゃかむにぶつ しゃかによらい

○ 佐々木みつ氏が書き留めた詞章

おんにこ にこはらたてまいそ おんそわか 三回

さんべんがいしわさん

なむあみだぶ 三回 なむしゃか、むにぶつ 三回 なむじぞうだいぼさつ 三回
 じおじたい、なむあみだ 三回 なむだいの、くわんぜおん 三回 なむやおやまのじぞうさまよ
 たしけたまいや、じぞさまよ一なむ あみだぶつ、なむあみだぶつ 三回 ごぶんのれんげや、むきごろも
 こんじのおんによらいに あらわれて、一なむ あみだ、なむあみだぶつ なむあみだぶつ

しゃかたんげ

- × なむほんし、しゃかそん
 - しゃばおらいはっせんべん なむほんし、しゃかそん
 - (2) ほんせいがんこげんえど なむほんし、しゃかそん
 - (3) 四十九ねん、むせつせつ なむほんし、しゃかそん
 - (4) ねんくわこんしょ、こんづだ なむほんししゃかそん
 - (5) しょほけんぞう、しんふぞく なむほんし、しゃかそん
 - (6) ばつだいがへん、にふねはん なむほんし、しゃかそん
 - (7) しょうほうこんじきちぐんしょう なむほんし、しゃかそん
 - (8) りやくにんてんぶつしゃり なむほんし、しかそん
 - (9) じよざい、りょうせんふめつど なむほんし、しゃかそん
 - (10) 五百だいがん、かいえんまん なむほんし、しゃかそん
- なむしゃか むにぶつ なむほんし、しかそん

十三ぶつ

なむ十三ぶつ なむほんす たしけたまいや十三ぶつ あのよのじょうどい うけたまい ふどう しゃかもんじゅ ふげん ぢぞう みろく やくし かんのおん せいし ああみだ あしゅくだいにつこうぞ
 おおじよ、りんじゅのその時は(めいどいまいるとき)
 ねんぶつ、一ぺんもうされづ ただいま、もうしおねんぶつ うけとりたまい
 ②なむほんし なむしゃかむにぶつ ①しゃかによらい

《注》

- 2) 古川実「青森県佐井村福浦のテラ行事調査報告」(『青森県立郷土館研究紀要 第38号』2014)「青森県東通村大
 利・尻労のテラ行事と念仏行事調査報告」(『青森県立郷土館研究紀要 第39号』2015)「青森県東通村入口・む
 つ市 大畑町小目名のテラ行事調査報告」(『青森県立郷土館研究紀要 第40号』2016)「青森県むつ市川内町松
 川・宿野部のテラ行事調査報告」(『青森県立郷土館研究紀要 第41号』2017)
- 3) 笹澤魯羊『風間浦村誌』1938(『下北半島町村誌』下巻 復刻 名著出版 1980)
- 4) 同3)
- 5) 青森県史編さん室『青森県史叢書 平成14年度 下北半島北通りの民俗』2002
- 6) 笹澤魯羊『大畑町誌』改訂5版 1963(『下北半島町村誌』下巻 復刻 名著出版 1980)
- 7) 同6)
- 8) 同6)
- 9) 山口文雄『石碑石仏が語る関根橋の歴史 完成版』2010 自刊(故山口文雄氏は関根橋出身で郷里の歴史や言い
 伝えを調査し、ワープロで記録し資料冊子を刊行した。関根橋の方々からの聞き取りや仏像・史資料を実見し記
 録している。関根橋の佐々木みつ氏からこの資料をみせていただいた。感謝申し上げます。)
- 10) 山口文雄『暮らしと信仰の移り変り』2005 自刊

(引用・参考文献)

- 青森県史編さん室『青森県史叢書 平成14年度 下北半島北通りの民俗』2002
 青森県史編さん室『青森県史 民俗編 資料下北』2007
 青森県文化財保護協会『新撰陸奥国誌 第四巻 みちのく双書第十八集』1965
 角川日本地名大辞典編纂委員会『角川日本地名大辞典 2 青森県』1991
 九学会連合連合下北調査委員会『下北 自然・文化・社会』1967
 笹澤魯羊『大畑町誌』『風間浦村誌』(『下北半島町村誌』下巻 復刻 名著出版 1980)



桑畑の地藏堂 (2017年12月24日)



桑畑の地藏堂 毎月24日ババが集まる (2017年12月24日)



関根橋の梅翁堂 (2017年12月23日)



関根橋 地藏様の年取り (2017年12月24日)



関根橋 観音様の日のフジ (2018年1月17日)